

「ヨハネの福音」

ヨハネの福音書 21:15～25

1. 愛する

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

21:15 彼らが食事を済ませたとき、イエスはシモン・ペテロに言われた。「ヨハネの子シモン。あなたは、この人たち以上に、わたしを愛しますか。」ペテロはイエスに言った。「はい。主よ。私があなたを愛することは、あなにご存じます。」イエスは彼に言われた。「わたしの小羊を飼いなさい。」

イエシュアはペテロに尋ねられました。「あなたは、この人たち以上に、わたしを愛しますか」と。この問いかけは、文法的には二つの解釈ができるそうです。それは①「この人たちが愛する以上に、わたし（イエシュア）を愛しますか。」という意味と、②「この人たちを愛する以上に、わたし（イエシュア）を愛しますか。」という意味です。いずれにしてもイエシュアを「愛する」ことが、イエシュアとペテロの関係において重要であることが示されています。では「愛する」とは一体何でしょうか。ヘブル語でこれをアーハヴ(אהב)と言います。この言葉が聖書で最初に使われた箇所は創世記 22:2 です。

【新改訳改訂第3版】

創世記

22:1 これらの出来事の後、神はアブラハムを試練に合わせられた。神は彼に、「アブラハムよ」と呼びかけられると、彼は、「はい。ここにおります」と答えた。

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」

22:3 翌朝早く、アブラハムはろばに鞍をつけ、ふたりの若い者と息子イサクとをいっしょに連れて行った。彼は全焼のいけにえのためのたきぎを割った。こうして彼は、神がお告げになった場所へ出かけて行った。

これはアブラハムが神様から命じられ、息子のイサクを全焼のいけにえとしてささげるために、モリヤに向かう場面です。ここで「あなたの『愛している』ひとり子」という部分に最初のアーハヴが使われています。つまりアーハヴとはアブラハムがイサクを、父親がその一人息子を「愛する」ことを意味しています。この当時における父親にとっての一人息子とは大切な後継ぎ、自分の家系が子々孫々へと続いていく未来を指し示すものでした。もし息子がいなければ、その家系は未来において存在しない、つまり滅びることになります。ですから父親にとって息子とは、非常に重要な存在だということです。そしてこのアブラハムにとってのイサク、その子孫の持つ意味は、他のそれとは比べ物にならないくらいの重要な意味を持っていました。なぜなら神様はアブラハムにこのように約束されたからです。

【新改訳改訂第3版】

創世記

12:2 …わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。

12:3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」

神様はアブラハムから一つの国民、国が起こることを約束されました。そしてその国によって地上のすべての民族が祝福されるというご計画があることを告げておられました。ですから「愛する」アーハヴとは、本来アブラハムがその一人子であるイサク、すなわち子孫、すなわちイスラエルの民に対する神様の約束、契約、そしてこの地上のすべての民族に対するご計画を「愛する」ものであったと考えられます。ちなみにこのアーハヴという言葉構成する三つのヘブル文字を見てみますと、神様ご自身を表すアーレフ(א)、窓を象り「見る」ことを意味するヘー(ה)、そして家を象り「家、家族、国、国民」を表すベート(ב)からなる言葉であることが解り、これらの意味を合わせると「神様の見つめる国」すなわち「神様の国、御国」という意味がアーハヴには表されていると考えられます。このような視点で「愛する」という言葉を捉えるならば、イエシュアがペテロに問いたかったのは、イエシュアによって、イエシュアを通して神様のご計画である「神様の国、御国」が成就、完成することを信じ、受け入れ、求めるかどうかということであったと考えられます。

2. 知っている

21:16 イエスは再び彼に言われた。「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛しますか。」ペテロはイエスに言った。「はい。主よ。私があなただを愛することは、あなたがご存じです。」イエスは彼に言われた。「わたしの羊を牧しなさい。」

ペテロはイエシュアに「私があなただを愛することは、あなたがご存じです。」と答えました。ここで「ご存じです」つまり「知っている、解っている」と訳されているヘブル語はヤーダ(יָדָה)と言います。このヤーダの最初の言及も見てみましょう。

【新改訳改訂第3版】

創世記

3:5 あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」

これはエデンの園において、サタンである蛇がエバを誘惑した時の言葉ですが、ここで「神は『知っている』」と訳されているのが聖書で最初のヤーダです。またそれは「善悪を知る」ことであるとも示されています。「善悪を知る」とは何が善いことで神様に受け入れられ、また何がそうでないのかを知ることであり、つまり神様に受け入れられるものとそうでないものを見分ける、区別する、判断すること、すなわち「裁く」ことを意味していると考えられます。この天地において「裁く」ことができる御方は神様ただ御一人です。しかし人は善悪を知る知識の木の実を食べたために、神様によってではなく自分自身で判断し、自己中心的な考えで「裁く」

ものになってしまいました。ですから本来ヤーダとは、神様だけが使うことのできる言葉であり、究極的には「神様による裁き」を指し示した言葉であると考えられます。ちなみにこのヤーダという言葉は構成する三つのヘブル文字を見てみますと、「手」を象った「神の手、御力、御業」を表すヨッド(י)、**「門、垂れ幕」**を象ったダーレト(ד)、そして**「目」**を象ったアイン(ע)からなることが解り、これらの意味を合わせますと「神様の御業とは、門にある目」であるということ、つまり神様が、誰がその門から入り、神様に受け入れられ、誰が入れないのか、受け入れられないのかを見張る、見分ける、見極めることを表していると考えられます。このような視点で「知っている」という言葉を捉えるならば、ペテロがイエシュアに対して言った「あなたがご存じです。」という言葉には、イエシュアとは神様が「知っている」のと同じように「知っている」御方、すなわち神様と同じ、一つである御方であり、誰が受け入れられ、神様の国、御国の、その門をくぐり、入ることができるのか、誰がそうでないのかを「裁く」ことができになる御方であるということを表していると考えられます。

3. 選び

21:17 イエスは三度ペテロに言われた。「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛しますか。」ペテロは、イエスが三度「あなたはわたしを愛しますか」と言われたので、心を痛めてイエスに言った。「主よ。あなたはいっさいのことをご存じです。あなたは、私があなたを愛することを知っておいでになります。」イエスは彼に言われた。「わたしの羊を飼いなさい。」

イエシュアがあえて「三度」も「あなたはわたしを愛しますか」と問いかけられたことにペテロは「心を痛め」たとあります。これはかつて彼がイエシュアのためなら「いのちも捨てます。(ヨハネ 13:38)」とまで豪語したにもかかわらず、イエシュアの十字架の前に、「三度」も自分が弟子であることを否定し「そんな者ではない。(ヨハネ 18:17、25、27)」とってしまったことに対するものだと思います。奇しくもペテロがイエシュアを否定したのは暖をとる「炭火」の前でした。そしてこの時点で今ペテロがイエシュアと話しているのも、なんとパンと魚を焼くための「炭火」の前であったということも、ペテロにこの事実を想起させるものであったと思われます。これは決してペテロ自身の、つまり人の決意、意志の力や努力などでイエシュアとの、神様との関係が回復される、もたらされるものではないことが示されていると考えられます。これは先ほどのヤーダ「神様が知っている」という意味にも示されていたように、誰が受け入れられ、誰が神様の国、御国に入ることができるのかは、人の意志や力によるのではなく、ただ神様の主権による選びによるものであることが示されていると考えられます。かつてイエシュアは弟子たちにこのように語っておられました。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

15:16 **あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。**それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。

15:17 **あなたがたが互いに愛し合うこと、これが、わたしのあなたがたに与える戒めです。**

このように、ペテロは自分がイエシュアを「愛する」ことは、弱く変わりやすくもろい自分の意志によるもの

ではなく、イエシュアが「**知っておいでになります**」と言うことで、それがイエシュアの、ただ神様の主権による選びにおいてそうである、すなわち「あなたがた（人）がわたし（イエシュア）を選んだのではありません。**わたし（イエシュア）があなたがた（人）を選び**、あなたがた（人）を任命したのです。」ということをもって、告白、宣言しているのだと考えられます。この告白は、自分の努力や頑張りでイエシュアについて行こう、事を成し遂げようとしたペテロが、その弱さ、もろさを痛感し、その考え方、生き方に挫折し、打ち砕かれたことを表していると言えます。ですから彼はここで「**心を痛めて**」と記されているのだと考えられます。

4. 羊を飼う

そしてそんなペテロに対してもう一つ、イエシュアが三度言われていることがあります。それは「**わたしの小羊を飼いなさい。**」「**わたしの羊を牧しなさい。**」「**わたしの羊を飼いなさい。**」というこれらの言葉です。ヘブル語で羊を「飼う、牧する」ことをラーア(רָאָה)と言います。この最初の言及は創世記 4:2 です。

【新改訳改訂第3版】

創世記

4:2 彼女は、それからまた、弟アベルを産んだ。アベルは**羊を飼う**者となり、カインは土を耕す者となった。

4:3 ある時期になって、カインは、地の作物から【主】へのささげ物を持って来たが、

4:4 アベルもまた彼の羊の初子の中から、それも最上のものを持って来た。【主】は**アベルとそのささげ物とに目を留められた。**

4:5 だが、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それで、カインはひどく怒り、顔を伏せた。

アダムとエバの間に生まれた兄弟、カインとアベル。ここで「アベルは『羊を飼う』者となり」と訳されているのが聖書で最初のラーアです。この記述から兄のカインは神様に受け入れられませんでした。羊を飼う者であった弟のアベルは神様に「目を留められた」、受け入れられたことが記されています。このように、本来のラーアとは、神様に「目を留められる」者、受け入れられる者を指し示していると考えられます。つまりイエシュアはペテロに「神様に受け入れられる者となれ」と命じておられるのだと考えられます。たとえペテロが三度イエシュアとの関係を否定しようとも、イエシュアは三度「神様に受け入れられる者となれ」と命じられ、ペテロの意志ではなく、神様の命令が、その御心がペテロを選び、受け入れていること、それが絶対に変わらない、揺るがないもの、決定的、絶対的なものであることがここに示されていると考えられます。

21:18 まことに、まことに、あなたに告げます。あなたは若かった時には、自分で帯を締めて、自分の歩きたい所を歩きました。しかし年をとると、あなたは自分の手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をさせて、あなたの行きたくない所に連れて行きます。」

21:19 これは、ペテロがどのような死に方をして、神の栄光を現すかを示して、言われたことであった。こうお話しになってから、ペテロに言われた。「わたしに従いなさい。」

「羊を飼う」ラーアが、カインの弟アベルのように神様に受け入れられた者を指し示していることを述べました。しかしそのアベルの末路は、決して喜ばしいものではありませんでした。

【新改訳改訂第3版】

創世記

4:8 しかし、カインは弟アベルに話しかけた。「野に行こうではないか。」そして、ふたりが野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した。

神様に受け入れられた者アベルは、妬みにかられたカインによって、野に連れて行かれ、そして殺されてしまいます。まさにここでイエシュアがペテロに言われたように、「**あなたの行きたくない所に連れて行きます。**」という言葉、預言につながっています。つまりペテロもまたこのアベルのように、神様に受け入れられたがゆえに、殺される定めにあるということです。普通「あなたは殺されます。」と聞いて恐れない者がいるでしょうか。しかしアベルのように、神様に受け入れられたがゆえに殺されても、その死からよみがえられたイエシュアがペテロにその姿を示して語っておられるのです。ですからこれは決してペテロを恐れさせるものではなく、ペテロによみがえりの信仰を与えるものであったと考えられます。

5. 最後の「型」

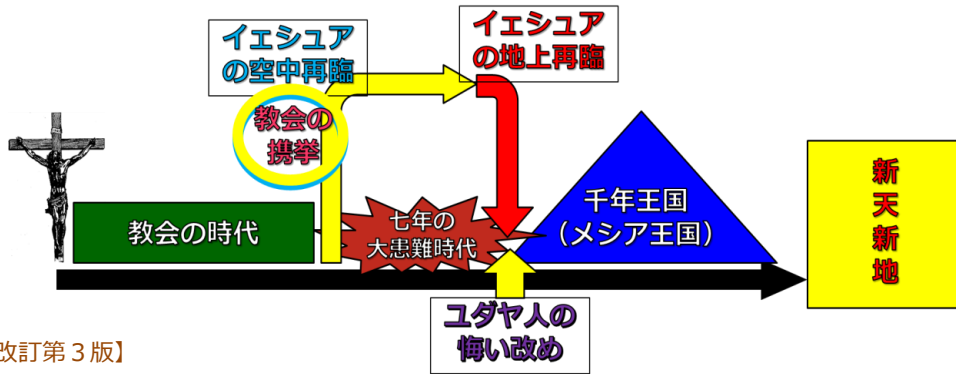
21:20 ペテロは振り向いて、イエスが愛された弟子があとについて来るのを見た。この弟子はあの晩餐のとき、イエスの右側にいて、「主よ。あなたを裏切る者はだれですか」と言った者である。

21:21 ペテロは彼を見て、イエスに言った。「主よ。この人はどうですか。」

21:22 イエスはペテロに言われた。「わたしの来るまで彼が生きながらえるのをわたしが望むとしても、それがあなたに何のかかわりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい。」

21:23 そこで、その弟子は死なないという話が兄弟たちの間に行き渡った。しかし、イエスはペテロに、その弟子が死なないと言われたのではなく、「わたしの来るまで彼が生きながらえるのをわたしが望むとしても、それがあなたに何のかかわりがありますか」と言われたのである。

イエシュアとペテロ、そしてイエシュアが愛された弟子によるこれらのやり取りは、一体何を表しているのでしょうか。一見するとこれは、自分と他人を比べることなく、人を見ないでただイエシュアだけを見つめて従いなさい、というような教訓メッセージにも読み取れます。しかし神様のご計画の「型」として見るならば、次のようにも考えられます。すなわちイエシュアに「わたしの羊を飼いなさい。」と言われたペテロとは、私たち教会、クリスチャンの「型」です。そして「**イエスが愛された弟子があとについて来る**」というのは、本来「**イエスの右側**」にいる存在であるイスラエルの民、ユダヤ人を指し示していると考えられます。なぜなら彼らは「**わたしの来るまで彼が生きながらえる**」と言われたように、イエシュアが来られるまで、すなわち「地上再臨」されるまで地上で「生きながらえる」、残される存在だからです。それとペテロすなわち教会は「**何のかかわりがありますか**」つまり何のかかわりもないことが示されています。これは教会、クリスチャンがイエシュアの「地上再臨」の前に起こる「空中再臨」によって「空中携挙」されることを表していると考えられます。教会とクリスチャンが「空中携挙」された後、地上では七年間の大患難時代が始まり、ユダヤ人たちはその苦しみによる悔い改めへと導かれますが、「**それがあなたに何のかかわりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい。**」とペテロに言われたイエシュアの御言葉に、私たち教会とクリスチャンがみな天に引き上げられ、大患難時代を通らないことが示されていると考えられます。



【新改訳改訂第3版】

I テサロニケ

4:16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。

それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、

4:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

このように、教会とクリスチャンは「空中」に引き上げられます。それがいつ起こるのか、私たちが死んだ後か、あるいは生きているうちにかは分かりません。いずれにせよ大患難時代を通されるユダヤ人たちが「わたしの来るまで彼が生きながらえる」ことに、教会とクリスチャンは「何のかかわり」もないのです。この事実が「型」としてこのヨハネの福音書の最後のしるしとして、ここに記されていると考えるならば、このイエシュアの「空中再臨」と「教会の携挙」が起こるその時こそが、聖書に記された神様の御計画がすべて真実であるということの最大にして最後の「あかし」、証拠、証言であるということが表されていると考えられます。

筆者であるヨハネは、このヨハネの福音書について 20:31 でこのように書き記していました。

ヨハネ

20:31 しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。

「イエシュアの御名によっていのちを得るため」に書かれた書物、それがこのヨハネの福音書です。ですからイエシュアが実際に誰にどのようにいのちを得させるとか、救われるのか、という視点を持って読む必要があると思われまます。ですから人が、私たちが何をし、何をしてはならないのか、という視点で読むのではなく、神様が何を成し、何を成そうとしておられるのか、という神様のご計画の視点で、この福音書を読み、それを理解し、そして信じるのが筆者であるヨハネの、そしてひいてはそれを書き記させた神様の意図を汲み取ることになるのではないかと思います。

6. 証言

21:24 これらのことについてあかしした者、またこれらのことを書いた者は、その弟子である。そして、私たちは、彼のあかしが真実であることを、知っている。

このように、ヨハネの福音書とは、筆者である「彼のあかし」、すなわちヨハネの証言であると述べていま

す。証言とは、すでに起こった、あるいはこれから起こる実際の出来事を指し示すものです。そしてそれはもちろん人ではなく神様が何を起こし、何を起こされるのかということについてです。しかし確かに他の箇所にはこのような記述もあります。

【新改訳改訂第3版】

Ⅱ テモテ

3:16 聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。

このように、確かに聖書は今の私たちの考え方、生き方を矯正するためにも用いることができます。しかし「有益」ではあっても、それが目的ではないと考えられます。少なくともこのヨハネの福音書に関しては、これは確かに「あかし」、証言であると述べられており、そしてその「あかしが真実であること」を証言するために書かれたと言うことができます。しかしヨハネはそれを書き尽くすことができなかつた、書き尽くそうとしても決してできないということを最後に述べています。

7. 永遠のご計画

21:25 イエスが行われたことは、ほかにもたくさんあるが、もしそれらをいちいち書きしるすなら、世界も、書かれた書物を入れることができまい、と私は思う。

最後にヨハネはイエシュアの「行われたこと」すなわち神様のご計画について、書き記すことができなかつたことがまだ「ほかにもたくさんある」と述べています。しかしもしその一つひとつを、すべてを書き記そうとしても「世界も、書かれた書物を入れることができまい」と述べています。この表現は神様のご計画が、やがて終わる、限りあるこの世の枠には収まらない、つまり永遠のものであることを表していると考えられます。神様の建てようとしておられる御国は、永遠に終わることのない、永遠に続く御国であり、そこに入る者に与えられるのは、もはや朽ちることも死ぬこともない永遠のいのち、永遠の身体です。このように神様のご計画はすべて永遠づくしですから、これを書物に書き記すとしても、永遠に続くので永遠に書き終わらないのです。ですからヨハネは「世界も、書かれた書物を入れることができまい」と述べたのだと考えられます。

このように、ヨハネの福音書は、イエシュアについての様々な記述を通して、神様のご計画の全体とその成就、完成を指し示し、そしてそれが永遠のものであるという結論をもって書き結んでいると考えられます。どんなに素晴らしい環境も、どんなに美しい、優れたものも、やがて終わってしまうものならば、それは虚しいものです。ですから神様のご計画が、とこしえに、永遠であるということは、私たちにとって最大にして最高の良い知らせ、福音の中の福音と呼ぶべきものではないかと思われまふ。ですから神様のご計画の完成である神様の国、御国を待ち望む者は、何よりもそれが永遠であることを覚え、喜び、主に感謝しましょう。

【新改訳改訂第3版】

I 歴代誌

16:34 【主】に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。